

# メディアの「表現」と社会的受容の連関性

## —社会意識を再構成する <sup>ダイナミズム</sup>力学 とその功罪—

千葉 秀 策

本稿では、メディアに描かれる表現に着目し、人々がそのメディア表象を受容することで、社会に対する意識がどのように揺さぶられ、再度構成されなおすのかを考察する。具体的には、創作としてのコンテンツにおける「同性同士の親密な関係を描く表現」の変遷と、一般層への受容によるジェンダー規範や性的マイノリティへの態度の問い直しの姿勢、あるいは性的マイノリティ当事者の社会への意識の変化を明らかにすることで、メディアの『表現』が社会意識をどう変えるのかを検討していく。

第2章では、なぜジェンダーやセクシュアリティに関する知見からメディア表象を分析するのかについて意味づける。まずはメディア表象それ自体の特性について、既存の研究を参照しつつ検討する。続いて現代社会におけるジェンダー秩序の形成過程とメディア表象の連関性について考察する。

続く第3章では、「同性同士の親密な関係性」を描く、「百合」と「BL」について、その表象のもつ力を検討する。同性同士の関係性を「表現」ということはどのような意味合いを社会にインパクトとして残す余地があるのかを検討したい。具体的には「同性同士の親密な関係性」を描くことは、異性愛規範のフレームをどのように揺るがすことができるのだろうか、という視座から検討した。

第4章では、二次元という描かれた表象に「性的惹かれ」を持つフィクトセクシュアル当事者の立場から、メディア表象それ自体のもつ構造的な力について検討する。メディアの表現によって生み出された「非対人性愛」としてのフィクトセクシュアルという概念は、既存のセクシュアリティへのまなざしを攪乱させ、対人性愛中心主義を問い直す造語実践であるといえる。一方的な「性的消費」という批判がもつ暴力性に関してはこの着眼点を導入することによって可視化されるだろう。

第5章では、メディア表象が性的マイノリティ当事者に対するまなざしをどう変えたのか、あるいは「同性同士の親密な関係性」を消費することの是非について考察し、本稿において取り上げた事例に関する全体考察として位置づける。

メディア表象は「同性同士の関係性」という可能性を発信することで、異性愛規範のフレームを問い直す可能性がある。その上で、どのような文脈で「同性同士の親密な関係性を描く表現」を語るのかという前提を立ち止まって考え、「メディア表象それ自体」を受容することが必要である一方で、「性的主体／客体」「消費される／されない」といった二分法をはね除ける可能性を秘めている存在といえるのである。